『スラヴ文化研究』Vol.21（2023）pp. 55–63

芸術家に伴走して――苦難の時代に芽吹くアート

鴻野わか菜教授へのインタビュー

◆鴻野わか菜（こうの・わかな）

ロシア国立人文大学大学院、東京大学人文社会系研究科博士後期課程修了。千葉大学文学部准教授を経て、現在は早稲田大学・教育・総合科学学術院教授。共著に『カバコフの夢』（越後妻有里山協働機構、2021 年）など。

――鴻野先生の研究内容を教えてください。

私は大学院進学を決めた頃に、すでにロシアの現代アーティストのイリヤ・カバコフに関心がありました。ただ、当時ロシアの現代アートを学べる大学院が日本にもロシアにもなかったことから、20 世紀初頭のロシア象徴主義文学を最初のテーマにしました。具体的にはアンドレイ・ベールイという詩人・作家です。ただ、ベールイもまた象徴主義文学全体も同時代の象徴主義の美術と密接な関係があったので、文学と美術の接点について考える上では適したテーマだったと思います。またロシアは現代アーティストの場合もアレクサンドル・ポノマリョフやレオニート・チシコフのように作品のコンセプトを詩で書くアーティストも多いですし、イリヤ・カバコフもアーティストであると同時に幻想的な小説を書く優れた文学者でもあります。ですから美術を研究する前に、他の教員のもとでロシア文学のテクストを読むという地道な作業を通して学ぶことができたのは、その後の研究にも役立ったと思います。

現在は、ロシア・東欧のアートを中心に研究しています。初めは 1930 年代生まれのカバコフと同世代で、ソ連の文化統制のもとで作品を自由に発表することができなかった元非公認作家に関心がありました。カバコフのほか、彼が属していたモスクワ・コンセプチュアリズムサークルなど、主に 60 年代から 70 年代の非公認作家を調べていました。そして、1999 年から 2002 年のモスクワ留学の間に、モスクワやロシア国内にいる若い作家やその作品にも展覧会を通じて関心を持ち始めました。また、ロシアの現代詩にも興味があり、当時はドミトリー・プリゴフのようなモスクワ・コンセプチュアリズムのアーティスト兼詩人の作家を研究していました。ロシアでは文学を味わう場が都市のいろいろなところに設けられており、昼間は各々の仕事をしている人たちが夜になると地域の図書館に集まってきて、朗読会でみんなで一緒に詩を聴くんです。その文化にとても感銘を受けて、

インタビュアー 片貝里桜：東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https:creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

朗読会に通ううちにロシアの現代詩に関心を持ち、それも研究するようになりました。

――これまでの研究者人生を振り返って、大変だったことは何でしたか。

最も大変だったのは、1999 年から 2002 年の長期留学中に戦時中のロシアにマイノリティーとして生きたことでした。到着して二週間ほどでモスクワで連続爆破事件が起こり、当時の政府はチェチェンのテロリストが犯人だと主張して第二次チェチェン戦争の契機になりました。今では複数の事実から政府が戦争を始めるための自作自演だったという説が濃厚ですが。やはり爆破事件が何度も起こると、街の雰囲気がどんどん暗くなっていきました。また、チェチェン戦争が始まると、戦争自体は遠い南方で起こっていても、徴兵などにより都市の人々の生活も変わっていきます。戦争中はほとんどの人は変わらない中でもごく一部の人が排外主義に走ったり外国人に対する差別を強めたりしていたので、実際に罵声や暴力を目の当たりにすることもありました。でもそれは同時に貴重な体験でもあって、社会の中でマイノリティーとして生きるのはどういうことなのか、日本で日本人として暮らしていると普段あまり考えないことを考えるきっかけになりました。また、ごく一部で外国人に対する差別が強まっても、そんな状況だからこそ見ず知らずの私にも優しくしてくれるロシアの方々にもたくさんお会いしました。

他にも、ロシアの大学院で学位を取るのは簡単ではありませんでしたね。外国人がロシアの大学院で学位論文を書くときに指導教員が週あたり決まった時間数を必ず指導するという規則があるそうで、一対一の授業が毎週ありましたが、その準備や勉強がとても大変でした。でも、こんなに時間を使ってみっちり指導してくれるので本当に糧になったと思います。このインタビュー記事をロシア・東欧研究を目指す若い院生の方もお読みになるとしたら、将来の仕事について考えるときに、ロシアなどの海外で研究をすることを積極的に考えていくと良いかもしれません。フランスやドイツの研究分野だと、海外で学位を取ることが日本でも比較的ポピュラーなので、現地での研究は可能性を広げてくれると思います。

――鴻野先生は美術研究者の中でもアーティスト一人ひとりに丁寧に寄り添っていく姿が印象的ですが、そこには何か思いがあるのでしょうか。

ロシアは旧ソ連時代に長い文化統制がありました。もちろんペレストロイカを経て徐々に自由化されていきますが、作家のレオニート・チシコフは、やっと自分が自由に表現できると思ったのはソ連崩壊の時だったと言っています。彼らアーティストは長い不自由な時代を過ごしているので、自分の作品に関心を持ってもらえることや自分の作品を展示・

発表できることに、とてもピュアな喜びを感じているんですね。留学中の私はアジアから来た一人の学生に過ぎないのに、彼らは本をくれたり、展覧会に招待してくれたりと、とてもフレンドリーでオープンでした。自分の作品に関心を持ってくれる人を手を広げて迎え入れるような温かさは、詩人もそうだったと思います。チェチェン戦争のような暗い時代にも大きな救いになりました。ロシアの方々は温かい人が多いと思います。それは政治的にも経済的にも苦労してきたからでしょうが、美術のことに限らず、あらゆることを心配してくれてとても人間的なんですよね。ですから、すばらしい作品を作ってきた彼らに伴走したいと思っていると、こちらが何かする何百倍も恩恵や恩寵を受け取ることになります。もっと彼らの作品を展示・紹介したいといつも考えています。

――鴻野先生は、日本各地のさまざまな展覧会に積極的に足を運ばれたり、ご自身で展覧会を企画・主催されたりと、研究室の中にとどまらない研究スタイルをされているかと思います。そのモチベーションや思いについてお聞かせください。

キュレーターをしているロシア・東欧研究者は日本では少ないのですが、海外には数多くいます。やはり、研究に基づいて展示や紹介をするのは社会の中で重要なことの一つかと思います。また、キュレーションは文学作品の翻訳にも似ています。文学研究者の方も研究するだけではなく、作品の翻訳を通して多くの人が作品に親しめるようにしますよね。先ほど戦時中の留学の話をしましたが、当時のロシアは俳句がブームで、ある新聞がロシア語の俳句コンクールを開催していました。20 世紀初頭のロシアの詩人も俳句をたくさん書いていますが、現在のロシアでも一般の方も書いていて、街中で「最近どんな俳句書いた？」なんて聞かれたりしました。また、キッチンの本棚（一番身近な本を置く場所の比喩）に芭蕉の俳句のロシア語訳があるんだと面識のない方に声をかけてもらったり、浮世絵や日本文化が好きなことをわざわざ伝えてくださったりと、その親切心に心が動きました。戦争が続き、一部で排外主義が高まる中でも、日本文化に関心を持ってこれほど心を開いてくれる人がいると感じた時に、やはり戦争中にも文化が持つ役割は大きいんだと思いました。それはロシアでずっと活躍してきたロシア人の日本文化研究者や学芸員の長年の努力の賜物だと思いますが、もちろん日本でもロシア・東欧に関して研究し発信していく必要があると思いましたね。

私たちが子どもの頃から普通のものとして享受している外国の児童文学の翻訳や外国映画、さまざまな展覧会などが、私たちの生活を豊かにしてきました。異文化に関心を持つということは、他の国の人たちの表情を知ることなので、やはり他者の生活や喜び、痛みを想像したり共感したりできるきっかけになるため、その文化の紹介や交流が本当に大

事なんだと戦争中に感じました。この経験から、もちろん美術作品について研究して論文に書くことも欠かせませんが、展示を通して実際に日本のいろいろな人たちに見たり体験したりしてもらうことも重視しています。また、日常的な例えで言うと、子どもがすごく悲しそうにしているときに自分のポケットに飴やお菓子が入っていたりすると、少しばかり嬉しいですよね。外国文化とはそのような思いがけないすばらしいものであって、普段ひょっとすると行き詰まりや閉塞感を感じている中で自分の日常とは少し離れた新しい視点や喜びをもたらしてくれるものだと思っています。

――昨年二月のウクライナ侵攻は、多くのロシア・東欧研究者の方にとって人一倍の衝撃として受け止められたと思います。鴻野先生の研究生活やご関心の範囲は、何か変化しましたか。

プーチン体制下のロシアで報道の自由が制限されてきたことも、またアートの分野だけでも政治や宗教、フェミニズムや同性愛を主題にした作品の展示が難しくなっていることも、ロシア・東欧研究者として知っていました。それについて私たち日本人研究者も多少発信してきましたが、全く不十分だったという後悔があります。ロシアの作家たちも、自由の規制や専制的な政府に対する批判を口にしたり作品で表現したりしてきましたが、戦争が起こった時にはやはり不十分だったと思っていました。彼らは「罪と恥の意識がある」と言っていましたが、日本のロシア・東欧研究者の中にもその思いを同じくする人がいると思うんですよね。ただ、もちろん戦争を始めたプーチン体制が悪いわけですが、一方でロシアの文化やロシアで暮らす人々を全て批判したり、断罪したりする風潮は望ましくないと思います。国家と政治家には罪があるけれども、そこで暮らす人々や戦争に反対しながらも声を上げられない人々の生活がある中で、文化を研究し伝えることがいっそう大切だと思うようになりました。今年イリヤ・カバコフは亡くなりましたが、生前ウクライナ侵攻が始まったのちに、彼は「文化の架け橋が両側から燃えている」と述べていました。その架け橋は、これまで作家や詩人、学芸員、翻訳者、音楽家たちがとても長い時間をかけて一生懸命作ってきた橋で、それがロシアの側からもウクライナの側からも燃えているということだと思います。でも諦めることはできません。戦争に反対するロシアの作家や詩人のことを伝えていくことが大事ですし、過去にどんな文化があり、現在はどんな文化があるかを研究し発信し続けることが、その架け橋を再建するためにも必要だと考えています。

また第二に、ウクライナの研究についてですが、私が今まで研究してきたカバコフやポノマリョフは二人ともウクライナ出身でもウクライナ語は話さないので、これまでロシア

語で研究してきたんです。ただ、今回の戦争でウクライナの作家が現在どんなことを考えて何を表現しているか、また過去においても何を表現してきたかを伝えていく必要があると思いました。具体的には、ニキータ・カダンという男性作家とジャンナ・カディロワという女性作家を中心に研究しています。彼らを含めウクライナの作家が何を考えて作品を作っているかをもっと伝えたいと思いますね。カダンもカディロワもバイリンガルで、もともと彼らとはロシア語で話していました。しかし、戦争が長引く中でウクライナ語を学ばずにロシア語で話し続けることは彼らの全体像を知ることにはつながらないので、現在外語大のオープンアカデミーでウクライナ語を勉強しています。ニキータ・カダンは先日来日して、来年の「大地の芸術祭」で作品を展示する予定ですが、言語面からも彼の作品についても研究したいと思っています。

――今後、研究者として挑戦してみたい事はありますか。

まず本の話からすると、現在ロシアの現代美術についての本を書き終えて、これから出版予定です。やはり、これまでの研究や今後の研究を書籍でまとめていきたいという気持ちはありますね。まだ途中ですが、次はロシアの現代詩についての仕事をまとめたいと思っています。詩は、ロシアでは何か特別なものや高尚なものというよりも、好きな人にとっては生きる支えであり、生活の一部にあるものだと思うんですね。ロシアの詩人はアーティストに比べてさらに生活が厳しい人が多いんですが、どういう詩人がどんな作品を書いて亡くなっていったかを知ると、作品の魅力やさまざまな生き方に触れることができます。読者が遠い国に友達を見つけるような感覚になれるような本を書きたいと思っています。また、現在書いた本の中では非公認芸術をあまり扱っていないので、カバコフや同世代の非公認芸術についても歴史的な経緯を踏まえつつ仕事をまとめていきたいと思っています。

そしてウクライナの現代アートについても、先ほど二人の作家の名前を挙げましたが、他にもとても良い作家が多いため、勉強を深めていきたいと思っています。それから、南極ビエンナーレにも参加したことがあるのですが、その開催の前にもロシアの画家が記録画家として南極へ行って絵を描いていたことなど、意外にも美術とさまざまな結びつきを持っています。ですから南極における美術の歴史についても調べたいですね。

他にも、展覧会の仕事も続けたいと思っています。芸術祭でいろいろな国の作家が来て、地域の住民の方々と交流しつつ、作家がその風土に根ざした作品を作ることを支えられればと思います。また、アレクサンドル・ポノマリョフやレオニート・チシコフは大きな美術館で個展をするにも値する作家だと思うんですね。比較的大きい規模で作家の作品を丁

寧に振り返る大個展ができるといいだろうなと思います。ですから、本や展覧会の仕事に取り組みつつ、その都度振り返って次の課題を見ていきたいと思っています。

――2023 年の現代ロシア美術界のニュースといえば、世界的にも有名なイリヤ・カバコフの他界がありましたね。鴻野先生はどのような思いでしたか。

私がカバコフと最初に会ったのは 1998 年で、名古屋の白川公園に彼の作品を設置する時だったと思います。シュウゴアーツの佐谷周吾さんに誘っていただき名古屋までご一緒したんですが、その時のカバコフの疲れきった苦しそうな様子が第一印象でした。当時からお身体にかなり負担があったんでしょうね。その後、99 年の水戸芸術館の個展（「イリヤ・カバコフ展 シャルル・ローゼンタールの人生と創造」）があり、また東京大学の沼野充義先生が主催されたモスクワ・コンセプチュアリズムのシンポジウムもあって、お会いしました。カバコフは当時ロシアにはあまりいらしていませんでしたが、私がロシア留学中にエルミタージュ美術館でカバコフの展覧会を見る機会がありました。すると展覧会場の出口にアンケートを取る人たちがいて、いかにこの展覧会に不満だったかということを誘導するようなアンケートだったんです。当時は、カバコフは「ソ連の恥を題材にして海外で成功したアーティスト」という見方があり、このような国内での受容があるんだと知って少しショックでしたね。けれども、しばらく経って開催されたトレチャコフ美術館での展覧会では、カバコフは〈母のアルバム〉という作品を展示しました。それはカバコフ自身の母親の手記を元にした作品で、ソ連の貧しい生活や苦しい環境下での生き方が表現されていました。一般の方にはこの作品がまだあまり知られていなかったので、会場ではカバコフの壮絶な人生を知って驚きが走っているのを目にしました。当初は、カバコフは外国に行って成功した、ともすると裏切り者のようなイメージがあったのが、この十年ほどでロシアの一般の人の中でもカバコフの生涯や作品に対する理解がかなり進んできたと思います。しかし、その中で彼が幾度となく感じてきた孤独はどんなに大きいものだったのだろうと思います。また、2015 年にカバコフのドローイングの調査で彼の家に一ヶ月滞在した経験がありますが、その時カバコフが言うには、「アメリカは結局アメリカ人のアーティストしか評価しないんだ」と。それは彼が感じた範囲での彼にとっての真実だったんですよね。旧ソ連のウクライナに生まれ、第二次世界大戦中にタシケントに疎開し、モスクワの美術学校に通い、アメリカに亡命してと転々としつつ、客観的にはアーティストとして成功しているのに、本人はどこにも居場所がないと感じ続けていたんです。その思いは、彼が「大地の芸術祭」に出展した〈人生のアーチ〉という作品に反映されています。壁の上で身を折る男性がいて、それは壁の向こうにもこちらにも居場所がない亡命者

としての自分のイメージだそうです。孤独や病による痛みとともに生きてきながら、困難な人生の中でもずっと創作を続けてきたことをとても尊敬しています。非常に難しい状況の中でも創作を続けられることを示してくれたという意味で、すばらしい作家であり、人間だったと思いますね。

イリヤ&エミリア・カバコフ《人生のアーチ》2015 大地の芸術祭
Photo: Nakamura Osamu. Courtesy of Ilya&Emilia Kabakov

――今後のロシア・東欧アートの動向をどう見ていますか。

ウクライナ侵攻の開始後、カバコフはやはりショックでしばらく作品を作れず、作り始めた作品は死や戦争をテーマにした恐ろしいものだったんです。それは公開しないとパートナーのエミリア・カバコフは言っていますが、でもその後に作り始めたのは、過去作のモノトーンのデッサンの上にカラーで現在の混乱した状況を重ねて描き、過去と現在を対比する作品でした。そこからも彼の深い苦悩は伝わってきます。それなのに、アメリカでは、ヴェネツィア・ビエンナーレでロシア館で出展していたことから戦略として自分のウクライナ色を強調しているのではないかという指摘を受けました。しかしながら彼にとって故郷は非常に重要な意味を持っていたため、やはり一部の周囲の無理解に苦しめられた人生だったと思いますね。

ただ、カバコフは亡くなってしまいましたがロシアでもウクライナでもどんどん新しい動きが出ています。ニキータ・カダンもジャンナ・カディロワも、現在は心理的に戦争に

関係がある作品しか作ることができないと言っており、時にはとても直接的な表現を用いることもあります。でも、カダンはミサイルで爆破されたウクライナの家の金属屋根の破片とドイツの木から作った土台をもとに平和な地域と戦争のある地域を組み合わせたオブジェを作りました。芸術的には大変完成度が高く、美しいものなんです。ですから、彼らは戦禍のウクライナの状況を伝えたいという思いがありながら、一方で創作上の新しい展開や新しい美の創造も続いていると言えます。

ロシアでも多くのアーティストが国外に出て、それぞれが重要な仕事をしていると思います。ロシアにとどまったジアナ・マチューリナという女性作家がモスクワ高等経済学院で美術を教えており、そこはもともと政府色の強い保守的な大学ですが、美術に関しては良い指導をしているようです。学生たちのグループ展に面白い作品がありました。きれいに作られたボール紙の家のオブジェの隣に胡桃を叩いて割るようなキッチンハンマーが置かれ、この家を壊すのも壊さないのも鑑賞者のあなたの自由という内容のソフィヤ・アレクセーエワの作品です。手作りの家は味わいも情感もあるのですが、その作品を展示して一日の終わりには、陰になって見えなくなっている家以外は全て壊されてしまうんです。もちろんロシア国内なので戦争の批判はできないのですが、家を壊すのも壊さないのもあなたの自由という作品自体が現在戦争で破壊されているウクライナの家を想起させるものです。主題の描き方も巧みで表現も秀逸だと思います。マチューリナ自身は、過去にイタリアで行った展示の再制作ですが、〈死の舞踏〉という作品を最近モスクワで再展示しました。足跡でダンスのステップを示す図がありますよね。人間と骸骨が一緒に並んでダンスを踊っているという設定で、人間の足跡と骸骨の足跡を並べた作品なのですが、ビジュアル的にはコミカルで軽快なんです。でもテーマとしては、現在それだけ死が蔓延しているということを示しています。マチューリナ自身もウクライナ侵攻の批判をしており、今挙げたのは戦争にまつわる作品ですが、そのような作品の中でも今とても良いものが生まれています。また、美術は戦争の間も戦争について語らない自由もあると思いますが、もちろん戦争について語っていない作品の中にも良いものはあります。

ウクライナ侵攻が始まり、ジャンナ・カディロワもカバコフもそうでしたが、多くの人が創作や研究の気力を失い、美術も研究も戦争を止めることができなかったと思いましたよね。その状況は日本でもあったという話を 2023 年 10 月に来日した時にカダンにしたら、「これは人類最初の戦争ではない」と言うんです。歴史を見ると戦争中に美術が果たしてきた大きな役割は明らかだ、と。彼は歴史のリサーチで作品を作るタイプの作家ですが、「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」というアドルノの言葉を引用しながら、それでも戦争中に美術は大きな役割を持つと静かに確信を持って語っていて、

ハッとしました。ですから、このように苦難が多い時代でも新しいものが生まれていくのを見ていきたいです。現地に行くことは難しくても本やインターネットを通して研究していくのも大切だと思います。

ニキータ・カダン《ゴストメルの彫刻》2022